

地域連携室だより



2022年 新年のご挨拶

病院長 柳 雅彦

みなさま健やかに新春をお迎えのことと、お喜び申し上げます。

当院も開院後5年目を迎え、中越医療圏の中でのバランスをとりつつ、また地域の皆さまの医療・保健・福祉のためのニーズを常に考えて参りました。

今後とも、ご理解とご支援を宜しくお願い致します。

一昨年からの新型コロナウイルス感染症の猛威は全世界を駆け巡り、昨年夏の当地域での流行の時は、皆さまの不安やご苦勞もいかばかりであったろうと心を傷めておりました。

しかし、皆さまの手洗いやマスク着用など基本的な感染予防の励行に加え、当地域での90%以上というワクチン接種率という高い予防意識のお陰でこの流行も一旦落ち着いた感が出てきました。

ただ、ウイルス側も新たな変異株の出現という形で、なかなか終息が見えてきません。

社会活動やイベントにも様々な制限がかかり、開催するにも細心の注意が必要など、今後もコロナ以前の社会とは変わったものとなっていくでしょう。

その中で人と人の関わりが希薄になっていくことが心配されます。

しかし、私たちは17年前の中越地震や10年前の東日本大震災で「絆の大切さ」を学びました。

この大切な想いを再認識していくことが、アフターコロナの社会を強くしていく大事な意識であろうと日頃より思っております。

絆・・連携・・大切なものです。

最後に皆さまのご健康とご健勝を祈念しご挨拶とさせていただきます。

今年もよろしくお願い致します。





地域連携支援部部長 家里 裕

初春のお喜びを申し上げます。



昨年の地域連携支援部も、「新型コロナウイルス感染症対策」に追われる1年でしたが、Zoomによるオンライン学習会や連携会議の開催、また面会制限の厳しい中での家族との面会や、認定調査などを実施して参りました。

幸いにも院内感染の発生もなく、地域の皆さまの感染対策への一助に感謝申し上げる次第です。皆さまにおかれましては、今後も感染防止に努め、元気に1年を過ごして頂きたいと思っております。

2017年の開院以来、小千谷総合病院は地域の中核病院としての役割を担って参りましたが、高齢者の入院には様々な問題があり、疾患が治っても退院までに時間を要することも多いので、入院時から皆さまとの連携を深め、患者さんやご家族に安心して頂けるよう、小千谷総合病院の役割を果たせるよう、今年も皆さまと顔の見える関係を築きながら、スムーズな地域連携を行って参ります。

今年が壬寅年。

60年に1度の巡り合わせ、新しく生まれ変わるなどの縁起の良い意味を持つとの縁起にあやかり、地域連携を新たな成長へと導ける1年でありたいと思っております。

皆さまにおかれましては、さらなる躍動の年となりますことを祈念しております。

本年も宜しくお願い致します。



地域連携支援部
患者サポートセンター
メンバー紹介



病診連携



上段： 官 平次 猪又 早見 安部 小林 吉田 小林

下段： 船越マネージャー 家里部長 水落チーフマネージャー

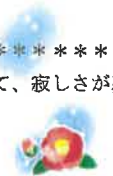


居宅介護支援
事業部



杵渕 根津

訪問看護



研修会報告

地域連携支援部 チーフマネージャー 水落 範子

人生100年時代。

誰もが、住み慣れた住居で人生の最終段階を迎えることが出来るよう、小千谷市在宅医療介護連携協議会では取り組みを続けています。その一環として、令和3年12月16日(水)18:30~20:30 Zoomを利用したWEB方式で、在宅医療介護「多職種連携研修会」を開催致しましたのでご報告致します。

- 主催：小千谷市在宅医療介護連携協議会事務局（小千谷市役所内）
小千谷市在宅医療・介護連携支援センター（小千谷総合病院 患者サポートセンター内）
- WEB 報告
 - 「市内介護保険サービス事業所等における看取り体制に関する調査」報告
令和2年度看取り調査ワーキングより
 - 「独居高齢者の在宅看取りにおける連携を通して」
ケアプランセンターカンラックおちや 居宅介護支援専門員 渡辺 あづさ様
小千谷市社会福祉協議会ヘルパーステーション 石田 則子様
月見医院 院長 根本 忠様
 - 「施設での看取り支援」
特別養護老人ホーム小塚田の里 生活相談員 櫻井百合子様
 - 意見交換

3. 参加者 66名

医師、歯科医師、看護師、保健師、薬剤師、理学療法士、管理栄養士、歯科衛生士、介護支援専門員、介護福祉士、生活相談員、訪問介護員、社会福祉士、小千谷消防本部救急係、他

4. 主催者として

今回は本人と家族が希望する支援のために、一症例を通して、居宅介護支援専門員、ホームヘルパー、医師それぞれの立場での関わりと連携の大切さ、難しさをお話いただきました。

関係者がチームの一員として自分たちに何ができるのか、患者本人が最期までその人らしく過ごせるためにどうしたらよいのか、繰り返しカンファレンスを行い、情報の共有や方針の確認を行っていくことが重要であることがよくわかりました。

市内の介護保険サービス事業所の半数近くが看取りを行っているという結果が出ていますが、本人への意向確認の時期や職員研修なども課題とされています。

「住み慣れた自宅で最期を迎えたい」と思っている方も、本人だけではどうにもできないこともあります。苦痛が強くなり、家族が辛くなった場合には入院も考慮するなど、本人を取り囲みみんなで考えていく過程が大切なのだと思います。

新型コロナウイルスが確認されてから、各種研修会・講演会がWEBやリモートといった形に変わり、日常的に行われるようになってきました。

便利になったとは感じつつも、開催する側の立場では慣れないことばかりでしたが、今後は多くの方が抵抗なく参加できるような研修会を行っていきたいと思いました。

とても有意義で勉強になった研修会でした。

***** 編集後記 *****
何かと制限の多い新型コロナウイルス対策ですが、特に面会制限は患者さんやご家族にとって、寂しさが募るものになりました。多職種連携研修会では、看取り支援の有意義な学びもありました。当院も終末期医療の指針やフローチャートがありますが、運用は難しいようです。今回の学びを活かしながら、看取りの支援体制について考えていきたいと思っております。